
怪奇話 ~ 俺が消えた夜 ~

赤神幽霊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪奇話 ～俺が消えた夜～

【Nコード】

N1899C

【作者名】

赤神幽霊

【あらすじ】

その日。少年は学校に忘れ物をした。取りに戻った彼は、そこで少しばかり不可解な体験をする。そして帰り道。墓地の前を通りかかった彼は……。

昔々。狩人は親キツネの前で、その子供のキツネを殺してしまいました。

親キツネは怒って狩人に飛びかかりましたが、鉄砲で撃たれて殺されてしまいました。息を引き取るその時まで、親キツネは呪詛を吐き続けました……。

現在。呪詛は呪いとなってこの世に残り続け、移ろいながら復讐の相手を探していました。

これはある年の冬。

怪奇に見舞われて姿を消した、少年の話。

俺は授業が終わって帰宅する途中だった。

帰る途中、俺は墓地の前を必ず通らなければならぬ。家の近くには若者が行くような遊び場もなく、俺は友人と遊びに行った場合は確実に夜になる。夜の墓地の前を通らなくてはいけなくなるのだ。夏はいい。少し遅いくらいなら明るいから。でも冬はすぐに日が沈んで真っ暗になる。

どうしてこんなことを言っているのか？

俺は十七にもなつて未だにお化けとかそついうのを怖がっているのだ。墓場や夜の学校などといった、いかにもな場所も苦手だ。何かが出そうな気がしてならない。実際に見たことはないのだが、どうにもダメなのだ。

いつしかその恐れは、冬の暗くなったあとに墓地の近くを通ることにすら憚るほどになっていた。友人の誘いも冬は全てキャンセルしてまで俺はそれを避けている。

そして今日。

「なんてことだ……」

俺の声が虚しく、茜色に染まりゆく風景に吸い込まれていった…。
家に着いた。だが鍵がない。学校に忘れて来たようだ。
記憶を呼び起こす。

体育の時、体育着のポケットに入れ替えたのを回収し忘れた
ようだ。

運が悪いことに親も今日は帰ってこない。今から学校に取りに行
ったとすれば、確実に学校に着くころには真っ暗になっていること
だろう。

本当になんてことだ。ついに致命的なミスを侵してしまった。こ
れでは夜の学校と夜の墓地前の両方を突破しなければならぬ。か
といつて一晩こんなところにいたら風邪を引いてしまう。風邪で済
めばいいが、下手をすれば凍死もありうる。

おのれ北国の寒さめ。いつかぶちのめしてやる。

そう思ったとき、

ヒュオオオオオオ

と、冷たい風が吹いた。

「寒っ!!!」

ごめんなさい。冗談です。許して下さい。北国の寒さ様。
まずい。これは行かなければ死亡確定だ。

できるだけ急ぐしかあるまい。背に腹は代えられないからな。

俺は全力で自転車をこいで再び学校へ向かった。

「やはり無理だったか……」

すっかり日が落ちてしまった。

学校の校舎を恨めしげに見やる。

夜の暗闇に包まれた、静かな校内。昼間の喧騒が嘘のようだ。と
ても同じ場所とは思えない。門はすでに施錠されていたので、人目
がないことを確かめてから乗り越える。

そして、どこか校舎に入れそうなところがないか探す。

一つ一つ、自分のクラスに近いところの窓から調べてゆく。幾つか調べたところ、施錠されていないものがあった。そこから中へと侵入する。

それにしても、用心だ。おかげで入れたのだが。

自分のクラスである二年六組は三階だった。階段を一段一段慎重に上がる。

コツ コツ コツ

いやに自分の足音が響いて聞こえた。

反響した足音が、誰かが後から付いてきているかのような幻聴となつて耳に木霊する。

ザア

「……………」

階段の踊り場で立ち止まる。二階からなにやら物音が聞こえた。

水の流れる音。階段の左隣はトイレだ。おそらく誰かが蛇口を閉め忘れたのだろう。

うん。そうだ。そうに違いない。ははは、はは、はあ……………。

「……………」

どうしよう。気になつて仕方がない。

本当に水の音なのだろうか？

わずかに生じた不安が、恐怖を増幅させた。一旦気になつてしまえば、もう確かめずにはいられなかった。

足音を忍ばせて二階に上がりきる。

そつとトイレの入り口へ。

音が聞こえてくるのは男子トイレだった。女子トイレだったらすぐにあきらめていただろうに。

俺は少しだけ顔を覗かせた。

……………誰かがいるような気配はない。

入つてすぐのところにある鏡が奥を映していたが、なにも映つていなかった。

その下には手洗い場。一つだけ延々と水を垂れ流しているものが

あつた。

俺は安心して止めに行った。

「これでよし」

全く、誰だよ。もったくない。やれやれと肩をすくませた。

そして、鏡を見た。

相変わらずそこには何も映っていなかった。

そう 何も。

「え……？」

薄闇のなか、そこに本来映っていてしかるべき自分の顔が映っていない

「どういうことだ……」

見間違いではないかと思い、目を軽くこすって、もう一度確かめる。

「っ！！」

心臓が止まりそうになった。

鏡に映る自分の顔。そして、その隣の奥に映る、キツネ目の日本人形。

その人形は、口を三日月のような形に歪ませて嗤^{わら}っていた。

目に焼き付いて離れない、鮮烈な赤の着物を着た“ソイツ”はただ嗤^{わら}っていた。

恐怖に引き攣^{くわ}った俺の様子を見て、楽しんでるかのよう。

笑う、嗤^{わら}う、晒^{わら}う、嘲笑う。

本当に“ソレ”が自分の後ろにあるのか、振り返って確かめてみたい衝動に駆られる。

しかし、そんなことをする前にさっさと逃げた方が良くと言う自分もいる。

逃げよう。

迷いは刹那。決断は一瞬。

俺は脱兎のごとく逃げ出した。

錯覚だ錯覚だ錯覚だあんなものはないあんなものはない見ていな

「見えていない何も見えていない俺は何も見えていない」

脇目も振らず自分のクラスへ走った。

「はあっ、はあっ……」

な、舐めんなよ。ロクに運動もせずに普段は家でゴロゴロしてるとはいえ、これでも五十メートルは六秒台だ。

お陰で今死にそう……。

呼吸を整えてから自分の席へ。

ガサゴソと掛けてあった鞆を漁る。

お、あつたあつた。

ん？ ちゃんと持って帰って洗えって？ 汗もかいていない上に

さほど汚れていませんがナニカ？

さて、鍵も手に入れたことだしさっさと帰りますか。

「……………」

そこで俺の動きが止まった。

じつと、誰かに見られているような気がする。

……………ゴクリ。

唾を飲み下す音が嫌に大きく聞こえた。

今更だが思い出した。最近この学校に広まった怪談話。

「夜な夜なさまよう日本人形の話……。まさか………実話？」

ある生徒いわく。夏の夜。肝試しに来たとき、来た時には校門の上に置かれていた日本人形が、帰りに見た時は昇降口に立っていた。まるでそこまで自分で歩いたかのように小さな足跡が間にあったという。

またある生徒いわく。忘れ物を取りに夜の学校に忍び込んだ際、廊下に日本人形が佇んでいて、その背後の窓は開いていた。それはちょうど日本人形が通れる程度の隙間だったという。

これ以外にも、実害のないものからあったものまで何件か聞いた記憶がある。

怖いと思いつながらも、いや、思うからこそ余計に気になって聞かえてしまうのだ。

ネットとかで見た誰かが、面白がって流した単なる怪奇現象の噂だと思っていた。

しかし、今しがた自分が見たモノは……。
違う違う。俺は何も見ていない！

思い出してしまった光景を振り払うように踵を返した。

視線は感じなくなっていた。どうやら気のせいだったらしい。風呂で髪洗ってる時によくある（？）あの感じだな。きつと。

廊下に出て、迷う。

元来た道に戻るか、それとも反対側の階段から降りるか。
階段までの距離はどちらも同じ。

……迷った末、来た道を辿ることにした。

こういう場合、避けるような選択肢を取ると何かあるのがお約束
……だと思っるのは俺だけ？

「……………ふうう」

よかった。何事もなかった。

開けっ放しにしておいた窓のサッシに手をかけた。

ぬるり……………

「……………！！」

手にねっとりとした何か。

慌てて手を引っ込めた。

ぬるぬるとしていて、それは暗がりでもわかる赤色の液体。

「うわああああああああああああああああああああ」

それを認識した瞬間、手に激痛が走った。

絶叫。自分でも驚くほどの声量。

「あああああああああつく、ああっ……………」

サッシに張り付いている剥がれた自分の手の皮。

そして、逆さまにぶら下がって痛みに喘ぐ俺を可笑しそうに見つめる日本人形の目。

「な、なんで……………何が……………」

そして、人形と目が合った。

これ以上ないくらい醜悪に顔を歪ませた“ソイツ”は俺に囁く。
『見つけた……。みつけたみつけたミツケタミツケタミツケタミツケタ！ キヒイイイイイイイイイイ！』
その言葉を聞き終えたと同時に、俺の意識は途絶えた。

「う……」

気がつくとも俺は開いたままの窓の下で倒れていた。

「……？ 俺、どうしてこんなところで……。確か鍵を取りに来て、それから……。なんだっけ？」

首を傾げながらも、ポケットに鍵が入っていることを確かめ、そくさと校舎から立ち去る。

その様を給水塔の上から、赤い着物の日本人形が眺めていた

ああ、鬱だ。

やっと学校を抜け出したが、まだ墓地の前を通らなければならぬ。

とりあえず携帯電話の電源を切っておく。念のため電池も取り外しておこう。

何かで読んだ気がする。死者からの着信ってやつを……。

そしていよいよその時が来た。

……何も起きませんように。

「！」

俺は驚きのあまり無様に転がった。

鳴り響く着信音。

電源を切って電池まで取り外したのにもかかわらず、それは何かを受信していた。

立ち上がって携帯を取り出す。

鳴り続けるメロディ。

ディスプレイの表示を見る。

【着信中】

そこには誰かの名前も、非通知とも表示されてはいなかった。ただただ空白があった。

「……………」

出るきもないのに指が勝手に通話ボタンに伸びた。

喉はカラカラに乾き、冬だというのに額には汗が浮かんでいた。

心臓は早鐘を打ち、息さえまならない。

酸素が不足して意識が朦朧もろろとしてくる。

出てはいけない。出たら取り返しのつかないことになる。

しかし、指は自分の意識を無視して通話ボタンを

押してしまった

『……………テ……………ヲ……………エモ……………ギ、ギイイイ……………』

聞こえてきたのは不明瞭な、嘔しわがれ声。

その時、背後に生暖かく纏わりつくような湿った気配。

ドクンドクンドクンドクンドクン

ひた……………

“何か”が頬を撫で上げた。

「……………！！」

俺は異様な感触に怖気立った。

それは人の手のひらのような感触。あるいはなめくじに這はわれたかのような感触。

もしくは、ぬめぬめとした液体を筆で塗りたくられたような感触。その感触は全身にゆっくりと広がってゆく。

体が動かない。逃げられない。

開いた携帯のディスプレイには、キツネ目の、血のように赤い着物を着た日本人形が映っていた。

俺は何者かの視線を顔の真横に感じ、携帯のディスプレイをなんとか動く目だけで確認した。

「……！」
記憶が蘇る。

鏡に映る日本人形。ぬめりとした感触。皮が剥がれた手。血に塗れた手。

「がああああああああああああああ……！」

手に痛みが走ったと同時に、全身からも同種の痛みが発生。

「ごばあがばああおぼおあああ……！」

もはや悲鳴すらまともに上げることができない。

声は口の中に流れてきた血によって、正確な音にはならなかったのだ。

そして、いつしか噎れた声を上げていることに、薄れゆく意識の中、気づく。

「……テ………ヲ………エモ………ギ、ギイイイ………」

先ほど電話から聞こえてきたものと同じ声を。同じ音声を。

俺の体はドロドロに溶かされて、やがて、携帯に吸い込まれるようにしてなくなった。

携帯電話と鍵だけがその場に取り残された……。

プツン。 ツ ツ ツ ツ ……

『えーでは本日最後のニュースです。一月二十日の夜から、F県N高校の………さんが行方不明になっていたことが本日二十三日、息子が一向に帰ってこないことを不審に思った両親の通報により明らかになりました。なお………さんは』

……

……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1899c/>

怪奇話 ~ 俺が消えた夜 ~

2010年10月8日15時59分発行